香川県立保健医療大学リポジトリ

小児看護学実習において初めて受け持ち児を訪室した時の学生の視点

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-06-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦, 浩美, 小川, 佳代, 舟越, 和代
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/126

香川県立保健医療大学紀要　第４巻，41－46，2007

小児看護学実習において初めて受け持ち児を訪室した時の学生の視点

三浦 浩美*，小川 佳代，舟越 和代

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

Students' Attitudes on Their First Visits to Hospitalized Children of whom They were in Charge in Child-Nursing Practice

Hiromi Miura*, Kayo Ogawa, Kazuyo Funakoshi

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

要旨

小児看護学実習を履修した短期大学看護学科３年生44名を対象に，受け持ち児のところに初めて訪室した際の状況や，その時感じたことに関する自由記述を分析した．総記述数265のうち，【子どもの様子】に関する記述が144（54.3%）であり，そのうち《子どもの学生に対する反応》49（18.5%），《子どもの活動の様子》35（13.2%），《治療処置を受ける子どもの様子》10（3.8%）だった．また【母や家族と子どもの様子】に関する記述が63（23.8%），【学生自身の様子】に関する記述が58（21.9%）などであった．以上の結果から，学生は，子どもの様子をよく見て，どう接するかを考えているが，疾患をもった子どもであるという認識がうすいことが窺えた．

Key Words: 小児看護学実習(pediatric nursing practice)，学生の視点(Students' Attitudes)，関係形成(Relationship)

*連絡先：〒761-0123　香川県高松市牟礼町原281-１　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科　三浦 浩美
*Correspondence to: Hiromi Miura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-Hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

Ⅰ．はじめに

近年の学生は，子どもと接する機会が少ないために，様々な発達段階にある子どもの特徴を具体的にイメージすることが難しいまま臨地実習に臨んでいる．また，子どもは可愛いと思っても接し方が分からない，人見知りや拒否をされるのではないかという不安感をもち，母親が付き添っている場合の母親との距離やコミュニケーションの取り方にも困惑・戸惑いを感じている[1-4]．

また，子どもは病状の経過が早く，急性期病院における在院日数の短縮などの影響も受け，小児看護学実習での患児受け持ち期間は３～５日前後と非常に短い．子どもと接すること自体に慣れていない学生が，短期間に子どもと家族を理解して看護することは非常に難しいことである．子どもを理解することにより，援助の必要性を認識し，学生が主体的に子どもと関わる姿勢につながる[5]ことから考えても，学生の子どもと家族の捉え方に対する教員の助言や支援が，早期から必要であると考える．

学生と受け持ち児との関係形成プロセス[6]において，学生は，最初に患児と仲良くなる《融和》を目指し，次に融和した患児との関係性をケア行動に活かす《ケア行動の一体化》を図ることで，最終的に看護者としての達成感を目指していることが明らかになっている．そして患児との融和が難しい学生に対し，患児反応の読み取りと視点の転換を促して，新たな対処行動への行動変容を支援することが大切であるとされている．しかし，この関係形成プロセスは，学生の行動に焦点をあてたものであり，受け持ち児をどのように捉えているかという学生の認識は明らかにされていない．また松木ら[7]も，初めて小児や母親と対面する紹介場面が関係の形成に向けた重要な場面として捉えたが，参加観察を行っており，学生の認識は明らかにしていない．

我々も，学生が初めて受け持ち児や母親と接する場面は，学生の緊張が強い状態ではあるが，関係の成立に向けた重要で貴重な一場面として捉えている．そのような場面で，学生が何を見て何を感じているのかを明らかにすることにより，学生の受け持ち児や家族の捉え方の実態を把握でき，その後の学生への効果的な指導助言につなぐことができると考える．

そこで本研究では，学生が初めて受け持ち児を訪室したときに，何を見て何を感じているのかを明らかにすることを目的とし，今後の実習指導に生かしたいと考えた．

Ⅱ．目的

本研究の目的は，学生が初めて受け持ち児を訪室したときに見たことや感じたことを明らかにすることである．

Ⅲ．方法

１．対象者：小児看護学実習を履修した短大看護学科３年生44名．
２．期間：2005年４～11月．
３．調査内容：各学生が受け持ち児を訪室した際の状況や，感じたことを調査した．
４．調査方法：初めての訪室場面を振り返り，Ａ４用紙１枚程度で自由記述するよう求めた．記録はその日の実習時間内若しくは翌日の朝に担当教員に提出させた．
５．分析方法：記述内容を一内容ごとに分け，共通する内容で分類した．その記述数や記述内容を比較した．
６．倫理的配慮：提出された記録の内容を確認し，その内容に応じて助言し，次回の観察の際に活用できるようにした．記録を研究データとして使用するに当たって，学生には全員に研究目的及び個人のプライバシーは厳守し，無記名であり，実習評価には関係しないこと，強制ではなく断っても何ら不利益は生じないことを文書と口頭で説明し，同意書へのサインで研究協力への了承を確認した．

Ⅳ．結果

総記述数は265だった．【子どもの様子】に関する記述が144（54.3%），【母親や家族も含めた様子】に関する記述が63（23.8%），【学生自身の様子】に関する記述が58（21.9%）みられた．（Table１）

１．子どもの様子

子どもの様子に関する記述のうち，《初対面の学生に対する反応》に関する記述49（18.5%）では，「初対面で患児はとても恥ずかしがっており」「時々笑顔で照れ隠しをしているようにも感じ」などがあった．《子どもの活動の様子》に関する記述35（13.2%）では，「テレビをみながら過ごしている」「ベッド柵につかまり立ちしてもよろけて座り込んでしまう」などがあった．《学生の働きかけに対す

Table１：Classification that the details and their impressions of their first visits

	カテゴリー	ローデータ	記録単位数（%）
子どもの様子	初対面の学生に対する反応	初対面で患児はとても恥ずかしがっており，	49（18.5%）
		患児は少し恥ずかしそうな様子を見せ	
		時々笑顔で照れ隠しをしているようにも感じ	
		あいさつをしたけど，患児さんは目を合わしてくれず	
		母親の後ろにすぐ隠れていた	
	子どもの活動の様子	テレビを見ながら過ごしている	35（13.2%）
		ベッド柵につかまり立ちしてもよろけて座り込んでしまう	
		患児さんが廊下をすごい勢いで走り回って，	
	子どもの気持ちの推測	はずかしいのかな．	18（6.8%）
		患児は敬語なので緊張しているのかなと思った．	
	学生の働きかけに対する子どもの反応	何を聞いても一言で返事が返ってくるし，	10（3.8%）
		すごろくを見せてくれたので，「今から一緒におねえちゃんとすごろくしない？」と誘うと「うん」と言ってくれ，	
	治療処置を受ける子どもの様子	吸入については，自分でしっかりと実施できていて，問題なかった．	10（3.8%）
		少し点滴ルートを邪魔がる．	
	子どもの症状の観察	絵を描いていても子どもの呼吸状態の変化はなかった	9（3.4%）
		時々湿性咳嗽があるが，発作はない．	
		咽頭の発赤や舌の奥がまばらに白くなっていた．	
	子どもの他の医療者に対しての態度	看護師さんが訪室して輸液ポンプを少し触っただけでも泣いていた．	4（1.5%）
		医者が訪問した際にぐずっていたりしたので，	
	子どもが好きなものの確認	その後絵本見て，好きなキャラクターを教えてもらう．	4（1.5%）
	きょうだいの様子の観察	受け持ち児の弟も私の名札（アンパンマン）に興味を持っていた．	2（0.75%）
	子どもの身の回りの観察	車のおもちゃがたくさんベッド上に置いてあったので	2（0.8%）
		ベッドの周囲には，本やゲームがたくさんあった．	
	子どもの発達	三才児ということで，話しの筋道は立てられていない部分や断片な部分での話しもあった	1（0.4%）
母親や家族も含めた様子	母親や家族の自分に対する対応	でも，母親がすごく話しやすかったので，	29（10.9%）
		母親は質問に対して優しく答えてくれた	
		父親がどんどん会話に入ってくれて，	
	母と子どもの様子	回診の後，母親にその回診を伝えることで誉められることを期待していた	22（8.3%）
		（母親が病室を離れるとき「すぐ戻ってくるけん，走って帰ってくるけん」とすぐに戻ることを強調して患児に伝え）子どもは泣くことなく母親を待てていた	
	母親からの情報収集	母親から子どもの普段の生活や性格についての話が聞けた	12（4.5%）
		「ゲーム好き？」という話から，母親が「ゲームが好きで家でもやってる．でも，入院中色んなゲームしよるけど，もうあきている」と言っていた．	
学生自身の様子	子どもと接する自分の行動	ついつい上から見下ろしてしまって患児さんの目線に合わせて会話できていなかった	23（8.7%）
		すぐに近づかず，様子，許可を得ながら近づく．	
	子どもとの関わり方の模索	今度からも色々なものを使ってコミュニケーションを図ろうと思った	12（4.5%）
		また，動きすぎて興奮して熱が上がらないようにも注意したい。	
	子どもの反応に対する自分の感情	「こっちに座ってみない？」と声を掛けても無視されたりしてすごく困った	9（3.4%）
		早くも大泣きしていたので不安は増強した	
	子どもにケアをするタイミング	Ｙ君が受け入れてくれたからこの機会を逃してはいけない．	7（2.6%）
		「Ｙ君，絵本読んでてもいいからお胸をもしもししてもいいかな」	
	看護師・医師が子どもを観察する様子	看護師が体温測定をするのを観察した	7（2.6%）
		腸の聴診は，患児に服を上げてもらい，座ったままで行っていた．	

る子どもの反応》に関する記述10（3.7%）では「何を聞いても一言で返事が返ってくるし」，《治療処置を受ける子どもの様子》10（3.8%）では「少し点滴ルートを邪魔がる」，《子どもの症状の観察》９（3.4%）では「時々湿性咳嗽があるが，発作はない」，《子どもの発達》１（0.4%）では「３歳児ということで話の筋道は立てられていない部分や断片的な部分での話しなどがみられた．」などの記述があった．

２．【母親や家族も含めた様子】

母親や家族も含めた様子に関する記述のうち，《母親や家族の自分に対する対応》に関する記述29

（10.9%）では「母親は質問に対して優しく答えてくれた」「父親がどんどん会話に入ってくれた」,《母と子どもの様子》に関する記述22（8.3%）では「その後，母親にその回診を伝えることで褒められることを期待していた」,《母親からの情報収集》に関する記述12（4.5%）では,「母親から子どもの普段の生活や性格についての話が聞けた」などの記述があった.

3．【学生自身の様子】

学生自身の様子に関する記述のうち,《子どもと接する自分の行動》に関する記述23（8.7%）では「ついつい上から見下ろしてしまって患児さんの目線に合わせて会話できていなかった」,《子どもとのかかわり方の模索》に関する記述12（4.5%）では「今度からも色々なものを使ってコミュニケーションを図ろうと思った」,《子どもの反応に対する自分の感情》9（3.4%）では「早くも大泣きしていたので不安は増強した」,《子どもにケアをするタイミング》7（2.6%）では「Y君が受け入れてくれたからこの機会を逃してはいけない」,《看護師・医師が子どもを観察する様子》7（2.6%）では「看護師が体温測定をするのを観察した」などの記述があった.

V．考察

初めて受け持ち児のもとを訪室したときの記述の約半数は【子どもの様子】に関する記述であった．その中でも多かったのが《初対面の学生に対する反応》18.5%であった.

《初対面の学生に対する反応》を観察することは，これから受け持ち児と関わっていく手がかりを得るための，必要な観察ができているといえる．しかし学生は，子どもとのコミュニケーションや子どもが泣くこと，拒否することについての不安を持って実習に臨んでいるという報告がある[1-4]．また，アイデンティティ確立の途中にある学生にとって，子どもからの拒否は自分の存在価値に対する否定ともなり得る[3]と言われており，そのような不安が,《初対面の学生に対する反応》への関心を高くしている可能性が考えられる．また，受け持ち児の拒否的反応だけでなく，笑顔などの好意的な反応も，学生の不安が軽減されるきっかけとなる[7]ことや，患児との関係性をより発展できる[6]など，受け持ち児の反応は学生にとって関心が高いことが窺える．しかし,《初対面の学生に対する反応》は，受け持ち児が学生を受け入れたかどうかだけでなく，発達，病状や母子関係など，様々な側面からアセスメントできる情報である．教員は，受け持ち児の反応が良くても悪くても，それが示す意味を学生が看護者として，冷静に考えられるように関わる必要がある.

次に記述量が多かったのは《子どもの活動の様子》13.2%であった．受け持ち児がどんな遊びを行っているか，どんな様子で過ごしているか等を様々な場面を捉えてよく見ていた．これは，学生が受け持ち児と関わっていくための手がかりを見つけようとして[6]いる結果だと言える．柴[6]は，一見傍観しているように見える学生が，実は内面では，見聞きしている情報から作戦を練っている，と述べている．学生が見ていた様々な《子どもの活動の様子》は作戦を練るための基礎データであり，その中には様々な手がかりが含まれ，それがいつどんな形で活かせるか分からない．そこで，教員は，自分が見たことを大切にすること，貴重な情報として活用し得ることを伝えながら，学生が見た《子どもの活動の様子》を共有したいと考える.

学生はまた,《子どもの好きなものの確認》をしていた．これも学生が受け持ち児と仲良くなる手がかりを得るためでるが,《子どもの活動の様子》を見るよりも，より積極的な意図が感じられる．しかしこれに関する記述量は少なかった．また,《子どもの身の回りの観察》は，受け持ち児の環境として重要であり，受け持ち児に関わる手がかりともなるが，記述量は0.8%と非常に少なかった．初めての訪室の段階では，学生から能動的に受け持ち児に働きかけることや，ちょっと視線を受け持ち児からはずして，周囲に目をやることが難しく，とにかく意識が受け持ち児の反応に集中している，ということが推測される.

受け持ち児の反応や活動の様子を見る，という段階からもう一歩子どもに寄り添い,《子どもの気持ちの推測》と，心理面を捉える努力をしたり,《学生の働きかけに対する子どもの様子》と学生と受け持ち児の相互関係を捉える努力をする学生もいた．これらも記述量としては少なく,2回目以降の関わりで学生が捉えることができるよう，教員の関わりが必要である.

そして,《治療処置を受ける子どもの様子》,《子どもの症状の観察》,《子どもの発達》も，非常に記述が少ない結果となった．入院している子どもは，何らかの健康障害をもち，治療や処置を受けている存在である．健康障害や治療が子どもにどのような

影響を与えているのか，ということは病気の子どもの理解に欠かせない．また発達の特徴を捉えることも，子どもの反応を正確に捉えるうえで重要である．ただ仲良くなるだけでなく，看護者として関わりができるためには，早期から《治療処置を受ける子どもの様子》《子どもの症状の観察》《子どもの発達》の視点で子どもを見ることが必要である．

次に，受け持ち児に接する【学生自身の様子】として，《子どもと接する自分の行動》を意識した記述が8.7%だった．目線を同じ高さにする，受け持ち児の反応をみながら近づく等，学習してきた基本的な関わり方を思い出し，忠実に実行しようとしたり，うまく話しかけられない自分を意識していた．また《子どもの反応に対する自分の感情》として，安心，戸惑いや不安などを意識した記述は3.4%と少なかった．子どもへの関わり方やその時の自分の感情を意識化できることは非常に重要なことであるが，やはり強い緊張状態ではそれも難しいことであり，教員の介入を要する．

また《子どもとの関わり方を模索》したり，《看護師・医師が子どもを観察する様子》を参考にしつつ《子どもにケアをするタイミング》を考えるなど，一生懸命子どもに接している様子が窺える．これも《子どもの活動の様子》と同様に，見聞きした情報をもとに作戦を練っている状態である．初めての訪室で，すでに作戦を練ることができる学生は少数であることが分かる．

また，学生は受け持ち児と母親や家族も含めた様子を捉えていた．しかしここで記述数が一番多かったのは《母親や家族の自分に対する対応》であった．実習前の学生の不安の内容として，子どもとのコミュニケーションに次いで多いものが母親とのコミュニケーションである[3・4]ことからも関係形成の不安に駆られて敏感になっている学生の様子が窺える．また，《母親と子どもの様子》や，子どもを理解するための情報源として母親を捉えて《母親からの情報収集》をした記述は少数あったが，入院する子どもをもつ母親や家族の心身の様子を捉えた記述は見られなかった．

今回の研究結果から，多くの学生は，関係性や受け持ち児との関わり方の模索という視点から，受け持ち児や母親の様子をよく見ていることがわかった．しかし，受け持ち児の発達や心理面，環境，病気を持ち治療処置を受けているという側面についてはあまり目を向けられていなかった．このような傾向にあることを踏まえ，徐々に学生の視野を広げていけるような介入が必要である．その際には，学生が見てきた情報の言語化を助け，学生自身の気付きをもとに助言・指導していくことが大切であると考える．

Ⅵ．結論

小児看護学実習において受け持ち児のところに初めて訪室した際の状況や，その時見たこと感じたことに関する自由記述を分析した．総記述数265のうち，【子どもの様子】に関する記述が144（54.3%），【母や家族と子どもの様子】に関する記述が63（23.8%），【学生自身の様子】に関する記述が58（21.8%）であった．【子どもの様子】では，《初対面の学生に対する反応》や《子どもの活動の様子》の記述数が多く，【母や家族と子どもの様子】では《母親や家族の自分に対する対応》の記述数は多かったが，《治療処置を受ける子どもの様子》の記述が少なかった．学生は，子どもとの関係性を中心によく見て，どう接するかを考えていた．そのため病気を持ち治療処置を受けているという側面など，学生の視野を広げる介入を早期から行う必要性が示唆された．

Ⅵ．おわりに

学生が受け持ち児のところに初めて訪室した際の自由記述から，学生には「病気の子どもとその家族」という視点が不足していること，その原因には関係づくりについての不安を学生が抱えていることが窺えた．しかし，学生の記述する力によりデータの質に差が見られることが本研究での限界である．今後も学生の言葉を確認し補いながら，分析を重ねていく必要があると考える．

文献

１）小口多美子，関美知代，吉村由紀，菅谷千恵子，宮口恵美子，山本郁子（2002）小児看護学実習において学生が直面する困惑．第33回日本看護学会論文集－小児看護－:148－150.

２）江本リナ，長田暁子，鈴木真知子，安田恵美子，飯村直子，込山洋美，筒井優美（1999）小児看護学実習を行う学生に関する研究の動向と今後の課題．第30回日本看護学会論文集－看護教育－:32－34.

3）西田みゆき，北島靖（2003）小児看護実習における学生の困難感．順天堂医療短期大学紀要 14:44－51.
4）尾首睦美（1999）小児臨地実習における看護学生の不安要素に関する一考察．九州大学医療短期大学部紀要　26:51－57.
5）菅弘子,山本靖子,三谷浩枝,中野智津子(2002) 小児看護学実習における対象理解にかんする指導方法の研究:その３－指導場面の分析からの考察－．神戸市看護大学短期大学部紀要　21:125－135.
6）柴　邦代（2005）小児看護学実習における学生と受け持ち患児との関係形成プロセス．看護研究　38(5):397－410.
7）松木美奈子，大池美也子，北原悦子（2003）臨地実習における看護学生と小児とのコミュニケーション－紹介場面の参加観察による分析から－.九州大学医学部保健学科紀要　1:99－104.
8）山本靖子,菅弘子,三谷浩枝,中野智津子(2001) 小児看護学における対象理解に関する指導方法の研究:その２－臨地実習における子どもと学生の相互関係場面の検討－．神戸市看護大学短期大学部紀要　20:75－81.

Abstract

We analyzed free descriptions given by 44 third-year nursing college students regarding the details and their impressions of their first visits to those children in the practice. Among a total of 265 descriptions, 144 (54.3%) addressed the "appearance of children," including 49 (18.5%) with "children's responses to the students of the first meeting," 35 (13.2%) regarding the "appearance of children in activities," and 10 (3.8%) concerning the "appearance of children under treatment." There were also 63 descriptions (23.8%) of the "appearance of children with their mothers/families," 58 (21.9%) of the "behavior of the students themselves," These results might reflect that while the students determine how to communicate with children based on close observation of their appearance, their understanding of children's morbidity is superficial.

受付日　2007年10月31日
受理日　2008年１月21日